



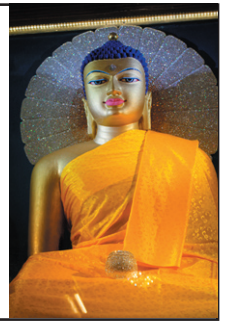
特定非営利活動法人

平成 24 年 支援の旅号 NO.



<http://nepai-mika.jp>

mika@ssr.co.jp



ネパール・ミカの会

平成 24 年 5 月 19 日発行 194-0035 東京都町田市忠生 2-5-36 tel042-791-0602

「第 15 次の教育支援と東日本震災慰霊祭を終えて」

NPO 法人ネパール・ミカの会

理事長 齋藤 謹也

「デリーは遠い、ルンビニは近い」

副理事長 今村 旭

第 15 次 (2012) ネパール教育支援の旅が終わりました。3 月 4 日から 14 日までの 10 泊 11 日の旅。いつも以上に記憶に残る旅となりました。私にとっては、35 年ぶりの二度目の佛蹟参拝の旅でもありました。



誕生 (ルンビニ)、成道 (ブタガヤ)、初転法輪 (サルナート)、涅槃 (クシナガラ) の 4 大佛蹟に世界文化遺産のタージマハル、アグラ城。法華経や無量寿経などが説法された常在説法の地ラジギールの霊鷲山、竹林精舎。そして、玄奘三蔵ゆかりのナーランダ大学跡訪問、誕生後、出家まですごされたカピラ城などの参拝巡礼を終え、釈尊讃迎の思いが強く心に響いています。

そして、マズワニ校やシッダルタ小中校、ティナウ小、それに支援要望校への視察など、校舎建設や図書支援を中心に国際ソロプチミストまちだーさつき他諸団体のご助力を得ながら“継続支援”をし続けているネパール・ミカの会への現地の『信頼』をひしひしと感ずる旅ともなっています。特に、創立二年目より始めた、マズワニ小中高校が発展を遂げ、教育内容が成果をあげている事をこの目で見て、この耳で聞いて心から嬉しさが湧き上がります。女子の就学率を上げることが、当会のルンビニ支援の大きな柱でしたが、それも果たされつつあり、しかも、高校の卒業生 17 名中 12 名が全国の共通試験を通り、「高校卒業資格」の認定を受け、地方としては驚くべき成績をあげたとの報告や、「釈尊」に関する試験では地域第一位となり、誕生佛の大きなカップをもらった事などが、私達に報告されました。すごいですね。前村長 (学校理事長) の顔が誇りに満ちていました。

そして、そして、3・11 東日本大震災の一周年慰霊法要を催したところ、既援助校の生徒達約 1000 名が集まり、かつ、聖地公園内の各国寺院僧侶達 (9 ケ国 36 名) の参加を得ました。これは、当会理事のヌルブ・ラマ氏の日頃の活動が形になったものであると大感激したところです。何の打ち合わせもできず、ルンビニの釈尊の沐浴池のほとりに立つ大菩提樹に慰霊の紙を貼り、現地調達で籠に果物を一対盛り、読経を始めました。当初、私共だけであったのに、だんだんと木の周りに各国の僧侶が集まり、それぞれの言葉で読経が続く、無事終了しました。ほんとうに一つの区切りができたような気がしています。

そして、病気をし、老年となり、何とか少しずつ引退をしていくような気がしていましたが、帰国後、もうひとつ体力に合わせ、私なりにやるべき事があるのでは、と思い直すようになってきています。

参加者の皆さまにとっても、忘れ得ぬ旅となったように思われます。会員の皆さまも、ひとつひとつ歩みを、ささやかでもゆっくりと重ねていくことが、どれほどすばらしい事に思いをはせていただき、歩みを共にしていければ幸いです。

今回の第 15 次教育支援の旅は、初の企画として、インド経由でネパールに入国した。最初の 7 日間はインド、残りの 3 日間はネパールでした。インドでは、期待したタージマハル、アグラ城を見学。さすが、世界遺産だけあって、写真や絵で見た実物の姿は、白亜の大理石の美の極みで、その壮大な存在に圧倒されました。

デリーからバスでアグラまで相当の距離を走り、見学の後、またデリーに戻る一日中バスでの十数時間の苦行で最初の一撃を受けた感じでした。インドは広い。翌日から、毎朝 5 時起床、早朝の出発が続きます。唯一の空路利用でパトナ着、続いてラジギル、ブッダガヤへ。

ベナレスにて有名な大河、ガンジスの沐浴を見学。夜の明けぬうちから、多くの見学者。沐浴者は、この日はごく少数で、信仰というより、観光的で精神的なものはあまり感じられない。大河に朝陽の昇る風景は、荘厳で沐浴者の多いときに、また来てみたい。クシナガラではブッダの入滅の地を見学した。

インド最後の早朝発で昼過ぎ、スナウリに到着。国境到着です。バスの苦しみを終えてこれまで 7 日間一緒だったインド人ガイド、カンさんに別れを告げた。カンさんは結構おもしろい人で退屈しなかった。国境では出入国の手続きもスムーズで、歩いてすぐあつという間にネパール入国、懐かしのルンビニはすぐそこです。

さて、旅の目標の第一であったルンビニでの東日本大震災の犠牲者の御霊を慰める法要と、シッダルタ校の開校式典、支援校の訪問、図書支援など、スケジュール満載です。

行く前に心配していた飲料水が原因か、とにかくお腹の調子が悪くなった人が 10 人中 9 人も出ましたが、なんとか役目を果たせました。法要はラマさんの手配が良かったようで、ルンビニ地区の 10 ケ寺から僧侶が 30 名以上、近くの児童生徒が約 1000 名位の多数が参列し、とても大がかりで、1 年前の 3 月 11 日の同じ時刻に合わせて齋藤理事長の読経に始まり、中国寺、韓国寺などアジアの多くの外国寺の僧侶らにより順次読経がされ、震災で犠牲となられた各霊位にはお釈迦様の生まれた菩提樹のもとではるるる日本を思い、現地の多くの人々の祈りも通じたことと思われます。

教育支援に関しては、ルンビニ地区の学習の意欲が向上した感があり、SLC (上級校進学資格試験) 合格者が格段に増えている現実をもってしても証明され、また、子どもたちも以前の支援開始初期のころよりも資質の向上感がありました。インドを経由してきたルンビニがなんだか親近感が湧いて、心の中が楽しくなりました。



ラマさんをはじめ、色々準備に大活躍の会員に敬意を表します。支援の旅が無事終了し、有意義な旅となったこと、参加会員の皆様ありがとうございました。

お釈迦様の誕生の聖地、ルンビニの菩提樹のもと、齋藤理事長の読経に始まり、法要が行われた。大きな菩提樹に「東日本大震災被害者諸精霊位」NPO ネパール・ミカの会の紙を掲げお供物を供え、各国の10ヶ寺の30人以上の僧侶が集まり、支援校の児童1000人近くが参列し、しめやかに、日本の、また同地の人々の多くの御霊に対し法要が行われた。

子どもたちはビタリと静かに座り、おしゃべりもせず、法要の終わるのを見て、とても感動しました。僧侶の方々も自国の言葉でしょうか、高く低く次々に経が唱えられ心が洗われていくようでした。法要の後に、子どもたちに飴が配られ、大騒ぎになりましたが、うれしそうに、すぐ口に入れ、また手を出すところが、子どもらしくもあり微笑ましくもありました。

大きな目的であった法要が無事終わり、午後3時過ぎにホテルに戻り、皆で庭に集まり反省会を開き、話し合いホッとしたことは楽しい思い出です。私の人生も残り少なくなった今、まだ元気で動ける時に、釈迦の足跡、仏後を訪れる旅に、参加できたことは本当に感謝でした。

インドの釈迦入滅の涅槃像を見学し、説明を聞いて感じたことは、私自身終わりが近づいたら自ら「ここで涅槃につく」と言えるくらい、心穏やかに自身の身の振り方を決めることができるでしょうか。宗教が心の平安を与えてくれるのでしょうか。ひとつの宿題が残りました。



インド国境に近いシッダルタ誕生の地ルンビニ、王子とし過ごしたカピラヴァストゥ城を訪れる度にいつかは成道の地ブッタガヤ、初転法輪の地サルナート、涅槃の地クシナガラの仏蹟を巡り国境を越えルンビニ入りする旅をと何年か考えていた。15次教育支援の旅は釈迦の四大仏蹟を巡拝し、東日本大震災の1周年にあたりルンビニで犠牲者の慰霊をする企画となった。

デリーでラマさんと合流し世界遺産タージマハル・アグラ城観光、ラジギールから仏蹟を巡る旅は早朝からの長距離移動、果てしなく続く悪路、鳴らし続ける派手なクラクションの厳しい修行の旅が始まる。ビンビサーラ王が釈迦のために敷いた石畳を登り霊鷲山へ、夕暮れの竹林精舎、玄奘も滞在したナーランダ大学跡、ともに苦行した仲間への初説法の鹿野苑、大塔と菩提樹の悟りの地、朝日のガンジスを船での灯明流しの聖地ベナレス、そして入滅の地クシナガルへ。果てしなく広がる荒野を進むバスの前方にアーナンダを従え北に向い歩く釈迦の幻が浮かぶ。この頃になると無性にネパールが恋しく何か故郷のように思えてくる。

スナウリでの越境は隣村へ入るようにのんびりと徒歩でネパール入りすると顔立ちがインドの彫りの深さから和やかな表情にかわり親しみを感じられる。

3月11日、午前中は上級校のテストの関係で昨年落成のビバルハワ校、シッダルタ校仮贈呈式、ティナウ校視察、マズワニ高校図書支援を済ませ、マヤ聖堂の大菩提樹に祭壇を設け齋藤理事長のもと各国僧侶と多数の支援校生徒による法要が厳かに執り行われた。読経のなか頭を下げ、手を合せる制服の生徒たちの姿は実に感動的であった。時差はあるものの大震災発生2時46分に釈迦の生誕地で慰霊が行われていたのは単なる偶然だったのであろうか。

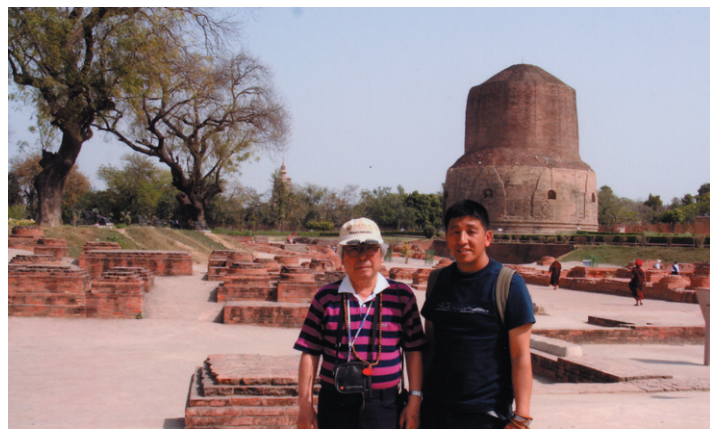
無事に法要を済ませた会員の安堵と穏やかな表情が印象的であった。忙しい中を法要の段取りに奔走してくれたラマさんに改めて感謝したい。

何もないうら寂しいカピラヴァストゥ城址に立ち、呆然と彼方を眺めていると不思議と何人もの人が想い浮かばれてくる。何年も奥さんの看病に尽くす傘寿を過ぎた山の先輩はどうしているだろう。

「君等の年頃に覚えたら一生忘れない」と平家物語や徒然草など熱心に暗誦させて呉れた中学の古文の先生は今・・・。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわり・・・遠く異朝をとぶらへば秦の趙高、漢の・・・心も詞も及ばれね」いつかは祇園精舎を訪れてみたい。そこで一句「さまざまな人想いだす カピラ城」

添乗中のモティさん、ラダ夫妻、転職の法華ホテルのマネージャー、先生方。ドマさんとヤンチェン、チョイニーちゃん、新婚のジャンモ夫妻、タマン大使夫妻、サルビンダさん、オマーン航空のスリジャナさんなど、異国を訪れるとき現地に知人の居ることがどれほど旅人の心を和ませるか、今回も懐かしい面々と親しく再会することができた有意義な旅だった。



「ネパールの笑顔」

加藤 雅子

今、日本は桜が満開で、本当にきれい！いつも通る菅原神社のソメイヨシノを観ると心から、日本人で良かったと思わせてくれる。ネパールでは、菜の花の黄色い絨毯が心和ませ、疲れた身体をやさしく癒してくれた。

今回の旅行で、カピラ城を訪ねた時、オレンジ色の花をつけた樹々があちこちにあり、緑の葉の中で一際目立っていた。ラマさんに名前をたずねると、傍にいる公園の管理の方に聞いてくれ、「ムユウジュ」と教えてくれた。(今、本当にこんな名前だったか自信ありません、間違えていたらごめんなさい)そして、管理の人が走って行って、花のついた枝を折ってきてくださり、とても恐縮してしまった。濃いオレンジでピロードのような肉厚の花びらが付いた日本では見たことがない熱帯的な花だった。

私達が訪ねた時、北インドは丁度、ホーリー・みずかけ祭りが行われていて、行く先々でピンクに染まったTシャツを着た人や顔に赤く色が付いた人を見かけた。沿道のお店には祭りに使う、いろいろな色の粉や水鉄砲が売られていた。この時は、カーストや人種や年齢など関係なく無礼講ということで、人々が楽しそうに色水をかけ合っていた。

しかし、その祭りを楽しんでいるのは男性ばかりで、女性の姿がほとんど見当たらない。インドでは驚くほど、女性と接する機会が少なかった。宿泊したホテルでも、フロントやレストランで働いているのは男性だけであった。女性は家庭で、家事や育児に専念しているだけなのだろうか。キャリアウーマンとして働く女性もいるのだろうけれど、まだまだ女性の地位は低いかもしれない。その点、国境越えて、インドからネパールに入り、元気に颯爽と自転車に乗っている女性を見た時は感激して、心から嬉しくなってしまった。宿泊したルンビニ、カトマンズのホテルでも男性と同等に働いていて、みんな笑顔がステキだった。ネパールは男女平等という点ではインドより数段進んでいるのではないだろうか。そんなネパールを支援する活動に参加できることに感謝!!

「ネパール教育支援の旅に参加して」

齋藤 美智子

このたびのネパール訪問で私は、3回目を迎えます。一度目は、今は亡き母と。二度目は、二泊4日の教育支援(強行スケジュールでした)。いつかミカの会の皆さんとメンバーとして同行したいな・・と思っていました。仕事も退職したので、心ゆったりと参加できたことが、自分としては、嬉しい限りでした。

お釈迦様ゆかりの4大聖地仏蹟を巡ることは、一生涯ただ一度と覚悟を決めてミカの会の皆様の後を付いていきました。又、今、築田寺<輪の会>で「仏教聖典」の読みあいをしていますが、聖地のことが時々出てまいります。

サルナート<初転法輪>の地名や、ラジギール<常住説法>の鷲の形をした岩山を思い浮かべながら今度は、読むことができます。

そして、インドの世界文化遺産タージマハルは、十代の若い頃から<愛情を注がれた白亜の城を見てみたいものだ>と憧れを持っていましたが、いつの間にかそのような気持ちも色あせていましたところ、バス往復12時間かけて訪問できると聞き、胸踊り、高鳴り、少しもバスに酔うことなく訪れる事ができましたことは、本当に幸せでした。

ネパールに入り教育支援、特にシリマズワニ高校の図書支援に、「国際ソロプチミスト町田一さつき継続図書支援」として立ち会うことができましたことは、どうにか任務を果たせたかと思いました。

ミカの会の15年の教育支援の実績を目の当たりに見て、すばらしい地道な活動に改めて敬服しました。書ききれない沢山の思い出・エピソードがあります。心に残る旅を有難うございました。



「旅行で感じたこと」

中野 千恵子

インドがとても気になっていたのと3月11日の法要をルンビニで行う事が決まったので参加した。インド デリー空港はとても大きくて発展途上真っ最中の国と感じた。

夜の暗い道をホテルまでバスで走る。工事中の道も多い。モノレールか電車なのか判らないが道の上を走っている。回りは車関係の会社が多いように思った。

翌日、朝早く タージマハルに向けて出発したがバスは赤信号なのに止まらないで走り続ける。何度も赤信号を無視するので、ガイドのカンさんに聞いてみる。「今の時間は警察がいないので止まらないようです」「え・・・」絶句。確かに左右から車が来なければ事故も起きないし早いだろう。合理的かもしれないがそれで良いの？

又、道に男性が並んで用をたしているらしい。私は眼があまり良くないので判らなかったが。だんだん明るくなり判った事だが、道の両側はゴミだらけ。いらなくなったゴミを持ち帰るルールはないのだろうか？

ガイドのカンさんは以前、日本に何か月か勉強の為、来日し、インドに帰ってきてから自分の家の前は花を植え綺麗にしているのだが、回りから変わった人と思われているとの事。

やがて、アグラに着きタージマハル観光。さすがに観光地は綺麗にされてきた。リスや鳥たちも気持ち良いのだろう。ナーランダ大学跡地、クシナガラ等の観光地の敷地内はどこもゴミはなく綺麗にされていた。何事もお金で解決するようだ。

4日目の夜、ブッタガヤの大塔がライトアップするとの事。ホテルから歩いて見学。昼間とは違い素晴らしく素敵で気持ちが良い。悟りを開いた池をみてから、大塔の回りを一周したが満月の月とで良かった。ホテルまでの帰り道、牛たちが一列になりながら、ねぐらまで行くのだろうか？どこに行くの？

6日目、ベナレスの早朝 ガンジス河の沐浴見学。日本のテレビで放映されていた場所で見たことがある風景。時間が早いのか沐浴している人は少なく見学者が何十倍いるだろう。小舟に乗り船上から太陽が上がるのを眺める。晴れていて良かった。やがて7cm くらいの葉っぱのお皿に載せてある蝋燭の火を灯し、これからの旅も無事に終わる様に祈りながら川に流す。

3月8日、9日が色水かけまつりだったので道も空いていてスムーズにクシナガラに着き、涅槃像を見学後ロータス ニッコーホテルに着き最後のインドの夜を楽しんだ。

スナウリからいよいよネパール バイラワに入ります。国境間は20M位。現地の人々は自由に出入りが出来る。ここでインドのガイド カンさん、ドライバー達とお別れ。

相変わらず、ざわざわしているがネパール独特の仏塔が見えて心からほっとしたのは私だけでしょうか？。これからはラマさんの活躍場です。

明日の法要の為の果物、お米、飴等を買求め、ルンビニの笠井ホテルに車が走ります。

道が良くなったのか、以前は一時間位かかったのが、30分位で着きました。

3月11日 大法要は2時からルンビニ公園内の菩提樹の樹の下で行われました。

僧院の住職さんが何人来て頂くのか心配でしたが、32人の方が出席してくれ、ホッとしました。

11日間が良い旅であった事に心から感謝です。

カンさん、ゴビンダさん、ラマさんお世話になりありがとうございました。



「教育支援の旅に初めて参加して」

西澤 忠

「百聞は一見にしかず」である。「ネパール・ミカの会」に入会して2年経つが、今まで活動の様子を聞いたり、会報を読んだりした程度でなかなか実感がなかった。漸くこのたびネパールの土を踏み支援活動の一端を知る事ができた。

今回の「第15次教育支援の旅」は前半にインド仏跡見学が組み込まれていて、こちらも私にとっては非常に興味深いもので有意義な内容であった。紙面の都合上多くは語れぬが、大震災から一年後の同日釈尊生誕地で執り行われた「東日本大震災被害者慰霊法要」は、私自身福島県にいて地震に遭遇し、その後言葉にならない状況を見たり、いまだ解決の一步も踏み出せない多くの人達を知る者の一人として、心洗われる思いであった。

この法要の事を被災地の方々に伝え、些かなりとも安らかな日常生活を取り戻し、元気を出してもらえようより一層の支援を続けたい。そうする事が法要に参加して下さった10カ国32名のお坊さん及び多くのネパールの子供たちに何よりのお返しとなるのではないか。

さて子供達の教育支援のことである。最初(3月11日)に訪問した「ビバルハワ小中校」校庭で子供一人ずつにノート・鉛筆を手渡したのだが、子供達のキラキラした瞳と共にナマステの言葉をもらい、私自身やっと「ネパール・ミカの会」活動の現地に立つことが出来たと嬉しさで思わず涙してしまった。

この感動が「ネパール・ミカの会」が15年間教育支援を続けてきている源泉であると確信した。その後2日間でルンビニ地区6校を訪問した。「ネパール・ミカの会」によって建てられた校舎や図書室、寄贈した参考書などが収納されているのをこの眼で確認でき、15年間の実績・重みを実感した。

また訪問を心待ちにしていた子供達を愛おしく思った。ただ駆け足での訪問校もあり子供達がどのように受け止めているのか気になる面もあった。出来る限り子供達と話せる時間配分も必要に思う。「ネパール・ミカの会」が校舎を造り、図書や文房具を寄贈するなど子供達の教育に貢献をしている事に違いないと思うのだが、その先をどう考えるべきなのだろうか？

この子らが成人し自分達のコミュニティ-がより豊かで自立していけるような教育支援を“ゆっくりと ささやかに 心を込めて”続けて行きたいものだ。

終わりに今回の旅メンバ- 齋藤理事長ご夫妻はじめ皆さんにお世話になりました。また現地でお手数をお掛けしたラマさん、出発から帰着まで同行して面倒見ていただいたゴビンダさんにも心から感謝します。



「インド・ネパール 11 日間の旅」

濱崎 ヤスエ

今年はインド周りで行く、ネパール教育支援の旅となった。出発前、インドの気温は33度ですとゴビンダさんから連絡をもらった。荷支度をしていた時点で東京は10度前後、まだ寒さが続いていて、冬物のセーターやカーディガン、長袖のシャツなどを多めに用意していた。

インドに着いてみると、言われたように暑かった。日中の気温は36-37度で夏物の着替えに苦労する事となってしまった。インドの旅と言うだけでわくわく感があるのに、ましてお釈迦様の仏跡地巡りの企画。夢が現実となり気持ちが高まる。

初日は世界遺産のタージマハル、アグラ城跡の観光。二日目からいよいよ聖地巡りとなる。先ずラージギルの玄奘三蔵が学んだナーランダ大学遺跡の見学(ナーランダとはハスの花のこと)。

お釈迦様が修行説法された霊鷲山。ここは夜明け前に出発し、山上で日の出を拝み、お経をあげる。早朝の空気が清々しかった。そして、お釈迦様が悟りを開かれたブッタガヤ。聖地、仏跡最高の聖地だそうで、その人の多さと騒然さに驚く。一巡して大理石の床にしばし座って足を組む。

夜、またライトアップされた菩提寺大塔と月を見に行く。そびえ立つ大塔と天空に輝く満月の美しかったこと。この地、この場所に居合わせた幸運に感謝した。

各地を説法された後、80歳で入滅されたと言うクシナガルへ。そして最後、支援の旅では毎回訪れているルンビニ公園の生誕地。29歳まで生活されたカピラ城跡と終えてみれば何とビッグな聖地巡礼であったことか。

それだけにこの間のバス移動はきつかった。毎日揺れに揺れて6-7時間延々と走る穀倉地帯の直線道路、途中途中通り抜ける収穫の混雑、人、もの、動物、車などどごった返している。動きのとれない車はクラクションを鳴らしっぱなしだ。高速道路と称する道も逆走する車、放し飼いの牛は自由に道を横切り、人も歩いている。これがインドなんだと思いながら楽しんだ。



インドに慣れた頃ネパールに入国し、我が家に帰った気分がほっとする。

ルンビニではカサイホテルに2泊。広々とした敷地、美しい庭園、自然菜園でとれた野菜料理がおいしく、くつろいだ。

3月11日は支援の旅の要、ルンビニ公園での東日本大震災犠牲者法要の日。菩提樹の大きな木の下に、学生1000名余りと私たち会員、お坊さん30数名が集い大法要が営まれた。齋藤理事長の主導のもと、お経の声が次から次と続く中、日本の犠牲者の方々への思いが高まり胸が熱くなり涙が出た。忘れられない一日となった。

私には何年ぶりの学校訪問で子どもたちに会うのが楽しかった。どの学校も大勢の子どもたちが歓迎してくれて、ノートや鉛筆、袋などを声をかけて一人、一人に渡して回ると、サンキュー、ナマステと笑顔と一緒に大きな声で返ってくる。以前とは随分変わったと感じる。やはりルンビニの子どもたちに会うのが一番の喜び。皆さんに感謝します。

「インド・ネパール佛蹟巡拝 およびネパール教育支援の旅で感じた所感」

森山 邦男

ダライラマなども言っていますように仏教では創造主の存在は認めません。ですから本来的な釈迦仏教は偶像崇拜を説かないのです。お墓参りをすることなどを仏教と思っている人が多い事と思いますが、此れ等は別に宗教でもなんでもなくて日本古来の民族儀礼なんです。死んだ人にお経を読むことはあっても、生きているうちに真の仏教を知ろうとする人は本当に稀で残念な事です。

釈尊の教えの基本は『「縁起」の法』を説きます。釈尊は成道の地ブッダガヤでその悟りを得て天地の道理（縁起の法）を見極められました。その釈尊の覚られました縁起の教えは、パリー語経典にはないと言われておりますが、漢訳文では、『三法印（さんぼういん）』と云う言葉で表現されております。『三法』とは「諸行無常」・「諸法無我」・「涅槃寂静」の、仏教の基本となる考え方であり、『印』とは「仏の真理のさとの内容を称するもの」です。この仏教の基本教義の「三法印」は各日本仏教の宗旨が異なっても共通しておるものです。

1『諸行無常』（しょぎょう・むじょう）

無常とは万物は常に刻々と変化している事実であり、仏教の信仰の原点です。移ろいゆくはかなさを情緒的に無情（むじょう）と嘆くだけでなく、無常だからこそ、真摯な自覚を持ち、光陰虚しくする事無く、この『今』を生きて生きることが大切であると、釈尊は説いております。

2『諸法無我』（しょぼう・むが）

この世に存在するものはすべて因縁（いんねん：〔直接・間接〕）の関わり合いに因って存在している事実なのです。私たちは先祖を因とし、両親を縁として得難きこの世に生まれたのです。この関わり合いによって存在している事実を「縁起（えんぎ）」と言います。したがって私たちはこの地球上で、自然環境も含めて凡ての人やものと把手供行（はしゅきょうぎょう：共に手を取り合って行く）して共生してゆかねばならないと釈尊は説きます。

3『涅槃寂静』（ねはん・じゃくじょう）

無常であり、無我であるこの人生に対する今、此所（ここ）での私たちの心掛けを示された言葉です。『涅槃』とは究極の安らぎを意味し、元々の意味は「（火を）吹き消すこと」、詰り、私たちが煩惱として有している『貪（とん）』『むさぼり』、『瞋（じん）』『いかり』、『癡（ち）』『おろかさ』の三毒を吹き消すことが出来れば心と身体の安らかなさまを得て保てるという教えです。この『涅槃寂静』に至る行を、密教系では「真言」、禅宗では「坐禅」、浄土系では「念仏」、法華系では「題目」等々ありますが、それは『涅槃寂静』に至る道の切り口が異なるだけで究極の安らぎを得ることの目的は一緒であります。これらに『一切皆苦』を加えて「四法印」となります。



4『一切皆苦』

仏教では、人生は自分の思うようにはならないため多くの苦しみをともしない、人生は苦である（一切皆苦）と云っています。その「苦」を分析したものが「四苦八苦」で、人生の根本的な苦しみの「生」・「老」・「病」・「死」の四苦に、「愛別離苦」・「怨憎会苦」・「求不得苦」・「五蘊盛苦」を加えて八苦とします。

「四苦八苦」とは、人生の根本的な苦しみの、1.「生」、2.「老」、3.「病」、4.「死」の4つを四苦とし、

5.『愛別離苦（あいべつりく）：愛する者と別れなければならない苦しみ』。

6.『怨憎会苦（おんぞうえく）：怨み憎んでいる者と会わなければならない苦しみ及び天災・事故等の予想もしない災害に遭う苦しみ』。

7.『求不得苦（ぐふとくく）：求めても得られない苦しみ』。

8.『五蘊盛苦（ごうんじょうく）：あらゆる身体的・精神的な苦しみ』。

以上の四苦に加えて、合わせて『四苦八苦』と云います。

無常・無我・苦という真理を受容して涅槃に至るという道は、原始仏典から終始述べられており、此れらの解決手段として、『十二因縁（じゅうにいんねん）』『四諦（したい）』『八正道（はっしょうどう）』『六波羅蜜（ろっぽらみつ）』等の具体的思考分析を仏教では致しております。

ですから釈尊の説いている「教え」は、神掛った創造主の存在や永遠不滅とする抽象的な絶対的真理といったようなものを説いてはおらず、「一日、一日を大事に生きる」という何処までも日常的な行動規範を説きます。

初転法輪（初説法）の地サルナートは釈尊がブッダガヤで悟りを得た後に、父王スッドーダナ（浄飯王：じょうぼんのう）がゴータマ・ブッダを守らせるためにつけた者だともいわれる五人の侍者が苦行の仲間として共に修行に励んだ。その過って釈尊が苦行を捨てた時に釈尊を見限って去って行った5人に説法するために、このパーラーナシーの鹿野苑（ろくやおん）へ赴くのである。サルナートは仏陀（シャカ）が初めて、この去って行った侍者5人達に説法を行った初転法輪の地である。この地で5人の侍者が弟子となり、この5人と森の鹿達を相手に説法を行ったとされ、かつてここには鹿が多く生息していたために、この地は仏教徒から鹿野苑とも言われています。

最初の説法は「放逸」と「苦行」の両極端を脱し離れた中道、すなわち八正道（はっしょうどう）と四諦（したい）であったと言われております。これを「初転法輪」と名付けられ、また、釈尊の時代は戦いが多かったようで、戦争は執愛の極みによってなされると説いております。

釈迦説法の地「霊鷲山：りょうじゅせん」は法華経を始め多くの経典を説いたと言われておりますが、釈尊は八十歳の時に死期を悟り、霊鷲山を降りて生まれ故郷の西へと向いました。そして涅槃の地（終焉の地）「クシナガル（クシナガラ）」に到りました。生まれ故郷のルンビニに向う途中のこの地で鍛冶屋の純陀（チュンダ）が供養した豚肉料理、または茸料理を食して激しい腹痛と下痢を起こしたのが、釈尊が死んだ原因とされております。（三大聖人の死について、キリストは理不尽な「磔による刑死」、ソクラテスは「悪法も法である」と言って受けた「毒杯による刑死」、釈迦は自ら知り得ていた「中毒死」と、この死の有り方については実に考え深いものがあります）

ラージギルの竹林精舎は、霊鷲山の麓の土地をカラunda長者が寄進し、ビンビサーラ王が伽藍をブッダに建立寄進した最初の僧院です。その名の通り過って竹林に覆われていたようですが、現在は公園になっていて、僅かに竹林あるだけで、伽藍の痕跡もなく往時の面影はありませんでした。

『ナーランダ大学 (大僧院)』は、『インド・ビハール州』中部にある、427 年に建てられた世界最古の大学の 1 つです。「ナーランダ」は『蓮のある場所』という意味で、蓮は知恵の象徴であるため、『知恵を与える場所』・『知恵を授ける場所』と解釈されております。

『ナーランダ大学』が出来た経緯は、『ゴータマ・ブッダ』がこの地を訪れた際、『Pavarika』と呼ばれるマンゴーの木立の下で説法したと言われており、それ以来、この地に各地から多くの人々が集まる様になり、仏教を学ぶ重要な場所となった。歴史上で最大の居住型の学校で、最多で 1 万人以上の学徒と、1,500 人の教員が居たとされ、高い堀に囲まれて、9 階建ての建物もあり、この中の図書館には 500 万冊を超える文献が保管され、多種多様な分野の学業が行われていました。

チベットの記録によりますと、インド仏僧『龍樹：ナガールジュナ』(生没年 150~250 年頃)が講義を行ったとされていますが、グプタ朝 (427 年成立) 時代には大学が出来たと考えられています。又、645 年 (唐時代) に、『玄奘三蔵法師』が 657 部に及ぶ經典を中国に持ち帰った事でも有名です。

1193 年に、『クトゥブッディーン・アイバク』(ムガル帝国のインド侵入以前にデリーを中心に北インドを支配したデリー・スルタン諸王朝最初のスルタン) に隷属した将軍『ムハンマド・ビン・バフティ・ハルジー』が率いるトルコ系イスラム人の侵略によって大学は破壊され、仏教に変わってイスラム教が入り込んで来た事により、この後のインド仏教は衰退していってしまいました。

しかしこのことによって、インド仏教より派生した仏教は、『チベット仏教』(ナーランダ後期 (9 - 12 世紀) から、チベット伝統から来ているといわれ モンゴル、中国北部に広まる) 『大乘仏教』(古代のナーランダ大学に起源を持ち、中国、ヴェトナム、韓国、日本に伝わる) 『上座部仏教』(ナーランダで興り、スリランカ及び東南アジアのミャンマー、タイ、カンボジアなどの地域に広がる) と、仏教はインドから多くの国々に影響を与え、今日、世界各国にまで広まって存続しています。

此の度の、インドの仏蹟巡拝は毎日車での移動が主で誠に難渋で (悪路と渋滞の中、乗車時間は長い時には 16 時間にも及びました) 埃と悪臭の中、疲労困憊致しましたがそんな中、インド大陸の平原の朝日・夕日の素敵さは又ひとしおでした。釈尊の成道の地ブッダガヤ、初転法輪 (初説法) の地サルナート、涅槃 (入滅) の地クシナガラ、釈尊が 29 歳まで生活をしたカピラ城の巡拝の等々は初めてで、佛教者として感慨も深いものでした。

釈尊の誕生の地ネパールのルンビニでは今回の目的の一つである 3 月 11 日の「東日本大地震被害者慰霊法要」を 10ヶ国 12 団体の僧侶、1000 人以上の小学生の参加を得まして無事に営むことが出来ました。ただまことに残念な事でしたが、子供たちに差し上げました飴ですが、子供たちが引揚げた後には一面にその飴を入れていた袋と包紙が散乱しており、我々メンバーで拾い集めました。このことは今後の教育支援の課題である事と思います。

また、開校式、建設途中の数校と建設依頼を受けた学校予定地の視察と優秀な女子学生 5 名への奨学金授与式にも参加して来ました。それにしても、彼の地の貧しい所の小学校は教室が有っても床に直に座って学ぶ事が出来る事は良い方で、教室が無い所は木陰での授業で雨が降れば学ぶ事が出来ません。それでもまだ学校で学ぶ事が出来ますのは良い方で、学校が有っても学ぶ事が出来ない多くの子供たちがまだまだ多くいる現状でもありますし、ネパール政府は山岳地方、インドとの国境沿いでは余り手を入れておらず、学びたくてもその学校すらなく少ないようです。

日本に於いて、6 世紀末・7 世紀初め、儒教の素養を備え、仏教的徳治主義を遂行して、現在の日本の繁栄と平和の礎を築いた聖徳太子 (574~622 年) を始め、玄奘三蔵法師 (唐代の中国の訳経僧 602~664 年) がインドから持ち帰った經典により、

また、鑑真 (688~763 年) や各祖師方により日本仏教は充実したものとなりました。恩について、仏教ではさまざまな經典に説かれています。

「四恩」とは、1 父母の恩 2 社会の恩 3 郷土の恩 4 仏の恩 『正法念処經』には、1 母の恩 2 父の恩 3 如来の恩 4 説法法師の恩の四恩が説かれており、『大乘生心地観經』では、1 父母の恩 2 衆生 (社会) の恩 3 国王 (国家) の恩 3 三宝 (仏・法・僧) の恩の四恩を説いております。人の人たる道は恩を知り、恩に報いるべきとそれぞれの經典は「四恩」を説いています。また、道元禅師は「今の見仏聞法は仏祖面々の行持より来れる慈恩なり、仏祖若し単伝せずば奈何にして今日に至らん、一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況んや、正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せざらんや、・・・・・・正に仏恩を報ずるにてあらん。」と仰せられております。

現在の日本は、夜道でも明るく防犯も行き届いて一人歩くことが出来、大災害等の何事が有っても平穩、平和で、また、社会秩序が保たれて、衛生的で何処でも水道の水がそのまま生で飲める国は世界中探しても他に類がありません。これは偏に、仏祖の成道から賜っての因縁がある故にと思っております。

このことから、今後も、釈迦がお生まれになりましたまだまだ発展途上にあるネパールの国へのご恩返しとして、微力ながらネパールの教育支援に力を注いで行きたいと思っております。また、末筆ながら、此の度の「インド・ネパール佛蹟巡拝および東日本大地震被害者慰霊法要ならびにネパール教育支援の旅」が大過なく円成されました事を、企画運営されました方々に感謝とお礼を申し上げます。誠に有難うございました。

『南相馬小高区の学校を訪ねて』

松浦 陽子

4 月に入ってすぐの 4 日早朝、夫と共に車で私の実家の家族が暮す福島の本松の仮設住宅に向けて出発。

あの震災以降、原発事故による放射能漏れで浪江の住居を奪われた実家の家族は放浪の民となり、最初は浪江でも北西の山の方に当たる「ダッシュ村」で有名な津島に避難させられ、その後放射能が思ったより遠くまで広がっているというので二本松の廃校へ 2 度目の避難。3 度目の猪苗代のロッジに行かされた頃には「もう浪江に帰るのは無理かも・・・」と皆あきらめの気持ちが強まってました。

そして今の仮設住宅に移って 10 ヶ月、やっと少し落ち着いた生活が出来るようになったところです。ここまで来る間には慣れない生活のストレスと先が見えないことへの不安から、母は帯状疱疹になり痛みがなかなか治まらず入院を余儀なくされ、そばにいる姉も何かと苦労が多かったようです。

一緒に行った夫は去年猪苗代にいた時に会って以来、1 年振りの家族との対面で、仮設住宅には初めての訪問でした。



さて今回はミカの会が募金した「東日本大震災募金」の後期分を、南相馬の警戒区域に当たる小高区の小中学校 5 校に届けるのが一番の目的。仮設で母の心づくしのお昼ご飯を食べてすぐに、風邪気味の夫を仮設に残して、姉の運転で母も一緒に南相馬の鹿島小学校の仮設の校舎に入っている小高中学校に向かいました。去年 6 月、最初の募金を届けに訪問した時、小高中学校は鹿島中学校に他の 4 つの学校と同居していて、校長先生は偶然にも私の小中学校の同級生の原中君でした。事前に小高中学校の教頭先生と電話でお話ししたら、もう校長は別の人に代わってました。

二本松から 1 時間 20 分位で南相馬の鹿島小学校に到着。今は春休みなので生徒はいませんが職員は勤務しています。グラウンドに仮設の校舎が建っており早速中へ。仮設から連絡を入れておいたのですぐに校長室に案内されましたが、校長先生はいにくに何処かで会議があるとかで留守で遠藤先生という女の先生が応対してくれました。

3 月に事前調査で電話をしたら「早急に書棚が欲しい」との要望があったので、3 月 21 日に既に 210,496 円を小高中学校に振込をしていましたが、今回の訪問ではその後に集まった分の募金 54,944 円をお渡しして来ました。廊下に書棚が 5 本もう購入してあったので写真を撮らせてもらいましたが、まだ図書が整理して無くて残念でした。



この仮設の校舎には 2 階に福浦小学校も入っていて、遠藤先生が案内してくれて福浦小学校の校長先生にもお話を伺って来ました。福浦小学校は震災当初は安田小学校に 7 校同居の状態だったので、生徒が不安定だったり規律も乱れていたそうです。小高中の遠藤先生も「思春期の生徒達が家も仮設、学校も仮設で不安定になり、幼児返りをしたり時には奇声を発したりと色々深刻な問題を抱えています。」と話していました。

5 校の内 2 校だけは訪問できましたが、後の 3 校の小高小・金房小・鳩原小は 3 月 27 日に鹿島中学校に新しい仮設の校舎が建って、そちらに引っ越してしまったので残念ですが今回は訪問できませんでした。しかし、小高中の遠藤先生は「警戒区域にある 5 校で仲良く募金を分けさせていただきます。」と言っておられました。会員や多くの善意の人達の真心が、教育関係充実費として生徒達の心身の成長の一助になってくれることを願って、南相馬を後にしました。

《東日本大震災支援募金配分報告書》

『前期』

支援金総額 873.496 円 (23.3/19~23.5/31)
 支援先 宮城県石巻市 門脇小学校 200.000 円
 福島県浪江町 大堀小学校 200.000 円
 福島県南相馬市 鹿島中学校 150.000 円
 福島県南相馬市 上真野小学校 150.000 円
 合 計 700.000 円

経費 (交通費)

宮城県 (新幹線・バス) 2 名 41,580 円
 福島県 (レンタカー・ガス・高速) 5 名 57,420 円
 合 計 99,000 円

残 額 74.496 円

『後期』

支援金総額 190,944 円 + 残額 74.496 円 = 265,440 円 (23.6/1~24.3/31)
 支援先 福島県南相馬市 小高中学校、小高小学校、金房小学校
 福浦小学校、鳩原小学校 (5 校で均等配分) 合計 265,440 円

前期 873.496 円、後期 190.944 円 合計 1,064.440 円
 皆様のご協力、本当にありがとうございました。

《ルンビニ大法要志納金会計報告》

第 15 次ネパール教育支援旅行中に、東日本大震災から丸一年を迎える 3 月 11 日に丁度お釈迦様の生誕地ルンビニに滞在中であることから、東日本大震災の慰霊を行うことになり志納金を集めさせて頂きました。皆様のお陰で本当に素晴らしい大法要ができました。ありがとうございました。

収 入： ルンビニ大法要志納金 106,000 円
 支 出： 大法要 お供え物 (菓子・果物・米)

〃 お坊さんお布施

〃 バス代 (子供達) ここまでの合計 68,236 円

大法要 菓子・袋 (日本で購入分) 8,475 円

タマン前大使にボダナート法要金 10,000 円

合 計： 106,000 円 - 86,711 円 = 19,289 円 (残金)

☑ 残金 19,289 円は一般会計に入れさせて頂きます。

『事務局便り』

遅ればせにやってきた春が足早に過ぎて、新緑の季節になりました。新年度に向けて心新たに歩みだす季節ですね。総会後から夏にかけてのお知らせです。

6 月 16 日 (土) 定例会 こもれび堂 午後 1 時 30 分より

7 月 21 日 (土) 移動例会 市民フォーラム 4F 学習室 A 午後 3 時より

懇親会 千寿閣・茶里人家 (Charlie House) 5 時より

9 月 1 日 (土) 和太鼓コンサート 築田寺 午後 4 時より

【編集後記】

第 15 次インド・ネパール教育支援の旅の特集です。かなりの強行軍で体調を崩したと聞いています。最近こうしたトラブルが多くなっています。少し注意しましょう。東日本大震災の支援も皆様の協力で報告する事が出来ました。日本中の原発が停止している今、改めて快適さと安全を計りにかける必要を迫られています。あなたならどうしますか？ S.K